

第67回全国へき地教育研究大会～京都大会～

大変有意義な大会でどの時間もどの場面も大変役に立つ内容でした。その中で、特に勉強になったことを抜粋して1枚にしてご報告いたします。

1日目の分科会より

●礼文町立香深井小学校 虻川康士 校長

第4分散会「児童生徒の分かる喜びや個性の伸長を重視した指導計画の改善・充実を図る」

☞子に応じた指導・支援の工夫より

1、児童の特性に合わせた学習プリント

・**ゴールの姿から児童に合ったプリントを工夫**しているということで、算数のみならず国語のさくぶんなどではなかなか描けない児童に、気づきなどを書く欄を設けるなど、間接指導でも有効活用している。

2、支援策

・支援を要する子→**ヒントカード**で誤答を正解に導く

・いま一歩の子→**ひらめきカード**で自力解決を促す

・支援を要さない子→**ミッションカード**で「～と・・・という言葉を使って説明せよ」などレベルアップを図る。

3、一人単学年学級の工夫～**架空の友達**を先生によるロールプレイだったりカードだったり工夫を要するが、なかなか難しい場面も...



2日目の研究授業より

●宇治市立笠取小学校

低(1学年5名、2学年2名):生活科 中(3学年3名、4学年5名) 高(5学年2名、6学年2名):総合的な学習の時間

全校児童19名のうち3名のみが地元の児童、残り16名は宇治市街からスクールバスで通う特認児童

☞「主体的・対話的で深い学び」における「深い学び」について研究している

1. 研究のスタート

答えが1つだったり絞られたりする教科では気づきを重視した指導が難しい。そこで、**結論・結果を必要としない生活科・総合的な学習の時間を窓口**に、「深い学び」について研究を進めた。

2. 「深い学び」とは

「深い学び」→**気づきの質を高める**ことを通して「**学ぶ喜びを味わい、学んだことをこれからの学習や生き方に生かすプロセス**」とした。特に、日常の中の気づきを重視して授業を展開している。

3. 授業の様子

子どもたちは、どの学級でも大変よく発言をし、**気づきを探そうと学びを楽しみ、これからの学びにどう生かすかを**考えている。日常的にこのような授業が行われていることが窺えた。

4. 今後の研究

授業改善につなげるために、教科横断的学習や研究の視点から、教科指導へのつながりや日常の授業にどう研究がリンクするのかを質問したところ、「全くイメージもなく、今はただ総合の時間での実践でしかないのが現状である」とのことでした。



(雑感)

・700名以上の参加者のほとんどは校長・教頭と思われる世代。若い先生はまばらであった。参加体制が取りづらいからだろうか。

・「複式学級ってなんですか?」と言われた←京都をはじめ、様々な地域では市・町・村費教員が加配となり複式学級が存在しないところがある。

・「教頭担任?」と聞き返された←虻川校長と自分の範囲のリサーチでは、児童15名以下の教頭担任兼務は北海道だけの法令のようだ...

・笠取小学校の19名のうち地元児童は3名という現状。地元民の協力は今後もらえるのだろうか...

・さすが抹茶の生産地1位の地。研究会では抹茶のクーラーサーバーと抹茶だんごが登場!!

・へき地教育の現状は、様々な校長や教頭話したところ、地域性はあれど共通課題が多くある。

